念願の「木琴」、6年かけて買いました

神奈川県立吉田島高校吹奏楽部

木琴を前にした吹奏楽部員。後列右端は顧問の綿貫彩音先生

㊤事務室窓口にある回収箱
㊦みんなでマークの仕分け

神奈川県開成町にある県立吉田島高校（中戸川啓二校長、生徒352人）は今年5月、初めてベルマーク預金を使ったお買いものをしました。それは「木琴」。楽器が不足している吹奏楽部が6年前から楽器購入を目的に始めたベルマークの収集活動が実を結びました。

吉田島高校は生徒の6割以上が女子だそう。吹奏楽部の部員7人も全員女子です。ふだんは週3回、音楽室で全体練習をしているほか、町内の社会福祉施設で土日に演奏したり、地域の中・高と合同バンドを組んで活動したりしています。

昔からの悩みは、持っている楽器が少ないこと。他校から借りたり個人で買ったりして補っているそうです。そこで「楽器が買えるくらいマークを集めよう」と、2013年5月に学校としてベルマーク運動に参加しました。校内や町役場に回収箱を置くほか、演奏会でも協力を呼びかけています。マークの仕分け・集計は部活の際に部員たちと顧問でします。今の顧問の綿貫彩音先生が新卒で着任した2016年4月には、すでに7万点を超すマークが集まっていたそうで、さらに収集を続け、昨年には10万点を突破。そこに今年度の部費を加えて、立派な木琴を購入することができました。

打楽器パートを受け持つ部長の橋本詩織さん（2年）は「新品はめちゃくちゃ音がいい。自分たちでたくさん叩けるから、ワクワクしました」と嬉しそう。もう一人の打楽器担当、大島花華さん（同）は「木琴は曲で使うことが多く、これまで違う楽器で代用していました。届いてよかったです」と話します。

ひとつ念願をかなえた吹奏楽部ですが、楽器をもっと多く揃えるため、ベルマークの収集は今後も続けるといいます。欲しい楽器は、マリンバ、ホルン、チューバ……。綿貫先生は「音のバランスをよくするために低音楽器を増やしたい」と言います。

同校の細野徳昭教頭は「マーク1枚1枚は小さな点数ですが、6年かけて木琴という形になりました。大切に代々使っていければありがたいです」と話しました。

本の魅力、小学生が「帯」で伝える

大阪で創作コンクール表彰式

本の魅力を短い言葉やイラストで表現する「本の帯」。児童書に巻くこの「帯」を小学生がデザインする大阪こども「本の帯創作コンクール」（大阪読書推進会、朝日新聞大阪本社主催）の今年度の入賞者が決まり、11月16日にエル・おおさか（大阪府立労働センター）で表彰式がありました。15回目となる今回は、15都府県とインドの日本人学校の計300校から1万2625点の応募があり、109点が様々な賞に選ばれました。

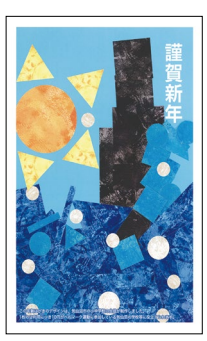
昨年から設けられたベルマーク賞。今年度は大阪府寝屋川市立北小学校3年の今岡悠登（いまおか・ゆうと）さんが受賞しました。中学年の課題図書だった絵本「きのうをみつけたい！」（アリソン・ジェイ、徳間書店刊）を取り上げた作品です。表紙側には「さあ　きょうのぼうけんにしゅっぱつ！」と興味をひく言葉がつづられ、かわいいイラストも。裏面には、絵本の内容を魅力的に伝えるキャッチコピーが並びます。

今岡さんは1週間に5～6冊の本を読むという本好き。昨年も応募し、佳作を受賞しました。「本がどんな内容で、どういうふうに読んでもらいたいか、わかりやすく伝わる言葉を選ぶように気をつけました」

今岡さんには表彰式で、ベルマーク財団の高木文哉常務理事から賞状と副賞の図書カードが贈られました。入賞者一覧と主な入賞作は大阪府書店商業組合のＨＰでご覧になれます。

「チャリティー年賀状」販売開始

支援金がベルマーク預金に加算される「チャリティー年賀状」の販売が11月20日から始まりました。1枚あたり10円がウェブベルマーク協会に寄付される仕組みで、全国のベルマーク参加校から被災校や自分の学校など、支援先を選ぶことができます。

販売されるのは、中高生も含めて実施された「全国学生デザインコンテスト2020」の入選作品104点と、宮城県気仙沼市の子どもたちが作った26作品で、1枚143円（税込）。インターネットで年賀状の作成・印刷・配送ができる「スマホで年賀状」「ネットで年賀状」サイト（アプリ）で買えます。手続きをすると送られてくるメールの指示に従えば、支援する学校を選ぶことができます。来年1月15日まで販売します。

博報堂アイ・スタジオが2011年から始めた取り組みで、これまでの支援金は累計736万4500円になるそうです。